

「自然」(フュシス)と身体*

—ポリュボス『人間本性論』における医学的「自然」観—

今井正浩**

I. 問題提起

帝政期ローマの医学史家ケルスス(1世紀前半頃)は、その著書『医学論』の序論において、ギリシアの医学者ヒポクラテス(c. 460-375 BC)について「この[医学という]学問領域を知恵の探究から切り離れた」と記している。この記述が『ヒポクラテス医学文書』(Corpus Hippocraticum)に収められている医学書の内容を直接ふまえたものかどうかについては明白ではないが、その意味するところははっきりしている。当初、医学は哲学の一部門とみなされていたために、医学研究はもっぱら哲学を専門とする人々によってすすめられた。ところが、ヒポクラテスという医学者の登場によって、医学と哲学との間に領域化がはかられ、医学は自立した学問として哲学から区別されることになった、というのである¹⁾。現に、CHに収められている医学書の中には、医学を自立的な学問として確立するという意図のもと、同時代の哲学(フィロソフィア)に対して批判的な視点に立って論を展開しているものが含まれている。

本論考では、このような視点に立った医学書のうち、いわゆる「ヒポクラテスの四体液理論」を展開していることで有名な、ポリュボス『人間本性論』(*De Natura Hominis*)を主題的にとりあげ、その論述内容から読みとれる医学者の基本的立場が、初期ギリシアの自然哲学者たちに共通してみられる創出的「自然」(フュシス)概念とは異なる「自然」理解に根ざしているということを明らかにしたい。NHはCHに収められている多数の医学書の中で、厳密な資料的典拠に基づいて著者を特定することのできる唯一の作品である²⁾。この医学書の作者であるポリュボスという医学者は、前5世紀後半から

前4世紀初期にかけて、コス医学派内において指導的な立場にあったヒポクラテスの弟子で、娘婿にあたる人物とされている³⁾。ヒポクラテス医学と言えば、『エピソード』諸篇に端的に示されているように、疾病の診断治療を入念な観察によって得た経験的判断に基づかせるという、実践的性格のつよいものとして理解されている。けれども、このような観察や経験的判断の内容が、一貫して、周辺環境が人間の身体に対してどのような変化をもたらすのかという問題関心によって、はっきりと方向づけられていることを見逃してはならない⁴⁾。ギリシア医学は「体液」理論を基調としている。けれども、こうした周辺環境からの影響のもとで、身体の内において特定の「体液」が増大し、これが疾病を引き起こす原因となるという考え方は、ヒポクラテスに代表されるコス医学派において明確化していったものである。

医学者ポリュボスがヒポクラテス医学の正統な後継者であったということは、NHが以上の前提に立って論を展開していることから明白である⁵⁾。医学者がNHにおいて意図したのは、それまで多くの医学者たちの経験則に基づいて得られた多様な医学的知見を統一的に説明しうるような明確な理論的枠組を提示することにあつたと思われる。「体液」という用語は、もともと病理学上の概念として、これに起因するとされるさまざまな疾病の発生メカニズムや、ある特定の「体液」が身体内部で恒常的に過剰であることによって形成される特異な体質について説明したりする場合に用いられるのが一般的であつた⁶⁾。医学者は、すでに医学者たちの中で広く認知されていた「粘液」「胆汁」という二種類の「体液」に「血液」を加えるとともに「胆汁」を「黒胆汁」と「黄胆汁」に区別した上で、以上の「四体液」を人間の身体を原理的に構成するものとして指定した。さらに「冷」「湿」や「熱」「乾」というような、いわゆる四基本性質の組み合わせを「四体液」それぞれに固有の「自然」に

* 2004年11月26日受理。

** 弘前大学人文学部西洋古典学研究室
キーワード：ギリシア医学、「自然」(フュシス)、「自律性」

基づく基本属性とみなし、これらを各季節の「自然」と因果的に対応づけることによって、各季節に特有の気候のもとで、特定の「体液」が身体の内部において増大(または減少)することを統一的に説明しようとしたのである。

このような理論化の背景に、初期ギリシアの自然哲学者の一人エンペドクレスの「四元素」理論からの影響を指摘するという見方がある⁷⁾。医学者はエンペドクレスの「四元素」理論を「四体液」理論を構築していくための基本モデルとしたのか。この問いに答えるためには、「四元素」の存在論上の身分から「四元素」の離合集散に基づく事物の生成消滅のプロセスにまでふみこんだ、より大がかりな議論が必要となろう。本論考では、この問題を正面からとりあげるのではなく、医学を自立的な学問として哲学から領域化するという医学者の基本構想がそもそも何をよりどころとして成立しているのか、ということに焦点をしばって考察をすすめたい。医学者がNHで明確化しようとしている哲学と医学との間の相違とは、両者の「自然」についての概念規定の仕方に帰着するように思われる。

以下の論考では、まず、NHで批判の対象とされている人々や医学者たちの主張がいずれも、人間の「自然」をその生成の起源にあたるものとしての基本元素から創出的(emergent)に形成された存在としてとらえるという見方を前提としていることを確認する。これに対して、NHの主要議論においては、このような人間の「自然」にかえて、人間の身体の「自然」が医学者自身の主観的な考察対象として提示されていることを示し、さらに、この「自然」が身体の構成要素にあたる「四体液」からの創出的な産物ではなく、むしろ、身体のあり方をその正常な状態と働きに基づいて規定する概念として、人間にそなわる「自律的」な回復・調整のための機能をささえているということを明らかにする。最後に、この身体の「自然」という概念の提示が、医学者自身によるいかなる人間理解の基本構想に根ざしているのかということに論及する。

II. NHと自然哲学的「自然」観

医学者はNHの冒頭において、自らの論はI(1)「人間の自然(フュシス)に関して、これが医学へと通じる範囲をこえて論じる人々(の論)を聴講することに慣れている人」(VI 32, 1~2. Littré)には聴講に適さない、と明言している。ここで「医学へと通じる範囲をこえて論じる人々」と言われているのは、人間の「自然」を「空気」や「水」などのようにI(1)「人間に内在することが明白でない」(VI 32, 5. Littré)何か一種類の元素に基づいて

説明している人々のことである。これらの人々は「有るもの」を一であり全体でもあるとする、その基本見解においては、全員が同じ立場に立ちながら、この一であり全体でもあるとされるものを実質的に何と呼ぶかという点において、それぞれが主張を異にしている。ある者はこれを「空気」とであると主張するのに対して、ある者は「水」あるいは「火」とであると主張し、それぞれが自らの主張を裏づけるような、もっともらしい証拠をあげている。このように、全員が同じ基本見解に依拠しながら、それぞれの主張内容が一致しないのは、それぞれの主張の前提をなしている基本見解それ自体が誤っているためであると医学者は断定する。現に、これらの人々の論争の場において、特定の人物がつねに優位をたもちえないという事実は、かれらが誰一人として、事の真実を理解していないということをはっきりと示している、というのである⁸⁾。

以上の人々につづいて、医学者は、人間の「自然」を「血液」「胆汁」といった一種類の「体液」に基づいて説明している医学者たちに対する批判に着手する。医学者自身によれば、これらの人々は「医学者たち」であり、すでにみたように、NHの冒頭で「医学の範囲をこえて論じる人々」とされていた人々、つまり人間を「空気」や「水」などのような一種類の元素に基づいて説明する人々とは基本的に区別されている。「空気」や「水」が構成元素として「人間に内在することが明白でない」のに対して、「血液」「胆汁」などの「体液」については、これらが人間の身体内部に存在することが知覚によってはっきりと確認されうることから、これらいずれか一種類の「体液」に基づいて人間の「自然」を説明しようとする人々の主張内容は、少なくとも医学論としての条件を満たしている、と医学者は考えているのである。

けれども、ここで重要なことは、これらの医学者たちもまた、すでに批判の対象とされた人々の場合と同じ前提に立って人間の「自然」を説明しようとしているということである。かれらは「血液」「胆汁」といった一種類の「体液」を人間の基本的な構成元素としてあげ、II(2)「これが「熱」「冷」に強制されて、その形状(イデア)と作用力(デユナミス)を変化させて「甘」「苦」「黒」「白」〔そのほか〕あらゆる性質のものになる」(VI 34, 12~15. Littré)と主張している。このように、一元的な構成要素としての一種類の「体液」が「熱」「冷」の作用によって、そのあり方・働きを変化させていくという考え方の基底には、人間の「自然」をその生成の起源にあたるものとしての「空気」「水」などの基本元素から創出的(emergent)に形成された存在としてとらえるという、初期ギリシアの自然哲学に特徴的な「自然」観が伏

在しているとみてよかろう⁹⁾。医学者がNHの冒頭において、こうした「自然」観に立って人間のあり方・働きを説明しようとする人々を「医学へと通じる範囲をこえて論じる人々」とみなし、以上のような議論は関心のあつた人々の自由意志にまかせるとしながらも、これにつづく論述において、これらの人々を批判の対象としているのは、こうした理由からである。

このようにみれば、以上の人々やかれらと基本的に同じ前提に立って人間を一種類の「体液」に基づいて説明している人々に対する医学者の批判には、こうした自然哲学的「自然」観に対して、医学者が一定の距離をおこうという姿勢を読みとることができる。

以上の人々に対する批判的な議論が、人間の「自然」についての医学者自身の基本的立場を明確にするという方向へと展開していくのは、NH第3章の論述においてである。ここで、医学者は、人間の「自然」を一種類の元素または一種類の「体液」に帰着させるという立場に立つかぎり、人間の生成についての説明が困難になるということを明らかにすることによって、人間の構成因は複数であるという帰結を導出しようと試みる。医学者の主張によれば、生成が起こるには、(a)同じ種族に属し、同じ作用力を有するものどうしが交わることが基本条件であり、さらにまた(b)「熱」が「冷」に対して「乾」が「湿」に対して、おたがいに適度で均等なあり方をしていることが第二の条件である、とされている。これらの前提(a)(b)から、以下のような結論が導き出される。

III(2)したがって、このような自然がほかのすべてのものにも人間にも存在する以上、人間は一ではなく、その生成に寄与するものうちのおのおのが、現に寄与したような作用力を、身体内部において有していることが必然である。(VI 38, 7~10. Littré)

この一節中の「〔人間の〕生成に寄与するものうちのおのおの」とは、生成の第二の条件にかかわるものとして前提(b)において提示されている「熱」「冷」などの四基本性質のことを指していると思われる。自然哲学的な「自然」観に立った場合、これらの四基本性質は、一種類の元素または「体液」がその形状や作用力を自在に変化させることによって、創出的に生じる属性であるのに対して、NHの議論では、人間や動物を含むすべての事物について、III(4)「これらの自然は、以上述べてきたものすべて〔熱〕〔冷〕〔乾〕〔湿〕から形成される」(VI 38, 16~17. Littré)とされているように、医学者は四基本性質のすべてを、あらゆる事物の生成に共通する基本原理としてとらえているのである。

けれども、自然哲学的な「自然」観に立つ人々の人間理解と異なるもう一つの側面として重要なことは、医学

者がこれらの四基本性質を人間の身体の構成因にあたるものとして提示している、ということである。以上の一節では、これらの四基本性質はそれぞれ、人間の生成に寄与した作用力を、生成した人間の身体内部において有している、とされている。これは「熱」「冷」などの四基本性質が、生成した人間の身体内部に存在する原理として、そのあり方・働きを規定するというかたちで、人間の生成にかかわっていることを示している。その証拠に、これらの四基本性質は、III(3)「人間の身体が終わりをむかえたときには「湿」は「湿」に「乾」は「乾」に「熱」は「熱」に「冷」は「冷」に向かって、おのおのがその自然へと帰着する」(VI 38, 10~14. Littré)とされている。医学者はここで、医学論としての人間の「自然」に関する自らの論述の対象領域を人間の身体にはっきり特定した上で、医学的な関心に基づいて、そのあり方・働きを原理的に説明するという方向へと議論を展開しようとしているのである。

このような議論の流れに沿って、つづく第4章では、いわゆる「四体液」が人間の身体を原理的に構成する要素として提示されることになる。医学者によれば、人間の身体は「血液」「粘液」「黄胆汁」および「黒胆汁」をそれぞれ自身の内部に有しており、これら四種類の「体液」がIV(1)「人間にそなわる身体の自然である」(VI 40, 1~2. Littré)とされている。ここで、医学者の関心は、人間の身体の「自然」を「四体液」に基づいて説明することに向けられているのであり、人間を含めたあらゆる事物の生成に寄与するとされる「熱」「冷」などの四基本性質が、生成した人間の身体内部に原理として存在するという先行議論との間には、内容上の整合性がないようにもみえる¹⁰⁾。だが、こうした疑問は、第7章の論述を参照することによって最終的に解消する。医学者は、人間を含めた諸事物の生成に寄与するとされるこれらの四基本性質の中から「冷」「湿」/「熱」「湿」/「熱」「乾」/「冷」「乾」という、たがいに相反しないものどうしの組み合わせを4組設定し、これらの組み合わせをそれぞれ「粘液」「血液」「黄胆汁」および「黒胆汁」に固有の「自然」に基づく属性として位置づけている。こうした論述をとおして、医学者が、生成全般についての議論と「四体液」に基づく身体の「自然」についての説明を、理論的に一貫したものとしてとらえていることは明白である。

むしろ、ここで問題なのは、身体の「自然」をめぐる医学者の主張が、この「自然」が身体の構成要素としての「四体液」から創出的に形成された存在であるということを含意していないか、ということである。医学者の説明では、身体を構成している要素は四種類の「体液」

とされており、この点において、一種類の元素あるいは一種類の「体液」を人間の「自然」として措定する人々や医学者たちの立場とは明らかに異なっている。だが、構成要素にあたるものが一種類ではなく、たとえ複数であったとしても、そこから身体の「自然」が形成されるとすれば、それぞれの構成要素から、それに固有の属性や働きをこえたあり方・働きをもつ存在が創出的に形成されるということのみとめることになる。医学者は、身体の「自然」を身体の構成要素である「四体液」からの創出的な産物とみなしているのだろうか。

III. 医学者の「自然」理解

以上の問題について考える上で、重要な示唆を与えていると思われるのは、疾病の原因をめぐる原理的説明にあたる、つぎの一節である。

II(3)というのも、身体に内在するものは複数であり、これらは、おたがいによって自然に反して熱を帯びたり、冷やされたり、乾燥したり、湿ったりする場合に、疾病を生むからである。(VI 36, 1~4. Littré)

この一節は、人間を一種類の「体液」に基づいて説明している医学者たちの主張内容から帰結するものが現実にはそぐわないということを明らかにするための、一連の論証に含まれるものである。その論証は、以下のような論証過程に沿ってすすめられている。

- (a)一元論の立場に立って人間を一であるとしたら、苦痛の原因となるような何か別のものが存在しないので、苦痛を感じるということはない。
- (b)けれども、現実には苦痛は生じる。
- (c)そこで、もし苦痛を感じるとした場合でも、苦痛の原因は一つであるはずだから、治療もまた一つでなければならない。
- (d)けれども、現実には多くの治療が存在する¹¹⁾。

以上の論証において、(d)「多くの治療が存在する」という事実が、身体には複数のものが構成要素として存在することを前提としている、と主張するのである。さて、これまでの解釈では、すでに引用した一節の中の「自然に反して熱を帯びたり、冷やされたり、乾燥したり、湿ったりする」という一文の主語にあたるものをA)「熱」「冷」などの四基本性質と解するか、あるいはB)「四体液」と解するのが一般的であった、けれども、これらの解釈には、いずれも大きな難点が含まれているように思われる。

A)は、かのガレノスが自らの『人間本性論』注解書において提示している解釈である¹²⁾。ガレノスは、直前の文における「身体に内在するもの」(*τὰ ἐν τῷ*

σώματι ἐνεόντα)をこの一文の主語とみなした上で、この「身体に内在するもの」とは事物の生成の原理としての四基本性質のことであると解している。けれども、NHの用例(VI(3)/VI 44, 20. Littré, VII(1)/VI 46, 10~11. Littré, XV(5)/VI 68, 7. Littré)をみるかぎり、この「身体に内在するもの」という表現がいずれの用例においても「四体液」を意味していることは、ガレノスの解釈を受け入れがたいものになっている。

では、B)についてはどうだろう。リトレをはじめとする近現代の研究者たちは、全員が以上の解釈に立っている¹³⁾。この解釈によれば、「身体に内在するもの」としての「四体液」がおたがいによって、その「自然」に反して熱を帯びたり、冷やされたり、乾燥したり、湿ったりする、ということになる。

ところが、この解釈はある大きな問題を含んでいる。それは、以上の解釈が「四体液」の「自然」についての医学者の主張内容と相容れないということである。NH第5章において、医学者は「四体液」のおのおのがそれ自身の「自然」を有するというを、これらの「体液」の形状(イデア)および作用力における相違という点に基づいて説明している。形状における相違というのは、これらの「体液」はその色合いが明らかに異なっているということであり、これに対して、作用力における相違とは、これらの「体液」に手で触れたときのその感触が決して似ていないということである。そして、この作用力における相違ということの理由づけとして、医学者は「四体液」はV(2)「一様に「熱」であることも「冷」であることも「乾」であることも「湿」であることもない」(VI 42, 5~6. Littré)ということをおげている。以上のことから、医学者が「四体液」の作用力を「熱」「冷」などの四基本性質によって規定されるものと考えていることがわかる。これらの「体液」は、それぞれに固有の形状と、四基本性質によって規定された固有の作用力をそれ自身の「自然」に基づく属性として有しているのである。

以上の論点は、NH第7章において「四体液」の増減を季節の循環と関連づけて説明するという、より大きな視座に立った議論をとおして、さらに展開されることになる。医学者によれば、「四体液」はVII(7)「季節の循環のもとで、おのおのが順に、その自然に基づいて、あるときにはそれ自身よりも多くなり、あるときには少なくなる」(VI 48, 21~23. Littré)とされている。これは、各季節の「自然」に基づく気候が、人間の身体の構成要素にあたる「四体液」それぞれに固有の作用力をそれ自身の「自然」に基づいて規定している四基本性質と因果的に対応づけられる、という前提に立ったものとみてよ

かろう。たとえば、秋に「黒胆汁」がもっとも多くなるのは、この「体液」に固有の作用力をそれ自身の「自然」に基づいて規定している「乾」「冷」という四基本性質の組が、秋に特有の乾燥した寒冷な気候と適合しているためである。ところが、冬がやってくる「黒胆汁」はVII(6)「冷やされることによって少なくなり、多量の降雨のせいと夜の長さのせいで「粘液」がふたたび増える」(VI 48, 17~20. Littré)ことになるという。以上の主張内容はきわめて重要である。ここには「黒胆汁」という「体液」に固有の作用力をその「自然」に基づいて規定している「冷」という四基本性質の一つが、冬に特有の寒気によって限度をこえて強められると、「黒胆汁」はこうした厳寒期の気候にもっとも適合した作用力をその「自然」に基づいて有する「粘液」へと転化していく、という医学者の見解を読みとることができるからである。このように「四体液」の相互転化が「熱」「冷」などの四基本性質によって規定された「四体液」それぞれに固有の作用力がその「自然」に基づく属性としての限度をこえることによって起こるとしたら、「四体液」がその「自然」に反して熱を帯びたり、冷やされたり、乾燥したり、湿ったりすることはないということになる。

以上の解釈にかわるものとして、論者は「〔「四体液」が〕おたがいにによって自然に反して熱を帯びたり、冷やされたり、乾燥したり、湿ったりする」という問題の一文における「自然」を「四体液」の「自然」のことではなく、身体の「自然」と解したい¹⁴⁾。この一文は直前の主文における「身体に内在するもの」(「四体液」)を先行詞としてもつ関係文中の挿入節にあたるものであり、この挿入節中の「自然」を直前の主文における「身体」と関連づけて解することは、前後の文章構造からみても妥当であると思われる。さらに、この解釈は、健康と疾病の原因を「四体液」それぞれの作用力と量と因果的に関連づけて説明している、NH 第4章の以下のような論述からも裏づけられるように思われる。

IV(2)もっとも健康であるのは、これらがおたがいの作用力と量において適度なあり方をしており、もっとも混合している場合である。IV(3)一方、苦しむのは、これらのいずれかが過少または過多となって、身体の内部で分離し、そのほかのすべてと混和することがない場合である。(VI 40, 2~6. Littré)

ここで注意しなければならないのは、IV(2)の論述は、身体がもっとも健康である場合についての説明であり、医学者は「四体液」が(a)おたがいの作用力と量において適度なあり方をしており、(b)もっとも混合していることを、このような状態が実現するための基本的条件と

してあげている、ということである。つまり、身体が最高の健康状態(summa valetudo)を実現するためには「四体液」が(a)おたがいの作用力と量において適度なあり方をしており、(b)のように最上の混合状態になければならない、というのである。ここには、少なくとも「病気ではない」という意味において、こうした最高の健康状態とは区別される身体の健康については、これをもたらず「四体液」の混合の度合いに応じて、さまざまな段階が存在するが、この「四体液」の混合という条件をみだすかぎりにおいて、身体は健康であるとみなされるという主張を読みとることができよう。

最高の健康とは「四体液」がおたがいに適度な状態にあって、最上の混合をつくりだすことによって実現する、身体の理想的なあり方のことである。しかし、現実には「四体液」が以上のような状態にいたることは、きわめてまれである。「四体液」は季節の循環のもとでたえず増減していることから、おたがいの「体液」の量は身体の内部において一定しない。そのため、これらの「体液」の作用力がおたがいに均衡調和するという事は、ほとんど望めないからである。けれども、現実には「四体液」がおたがいの作用力と量において、このような均衡調和にはいたらないとしても、このことによって、ただちに身体の健康がそこなわれるわけではない。IV(3)において、医学者は、疾病にともなう苦痛の原因を「四体液」のいずれかが過少または過多となって「身体の内部で分離し、そのほかのすべてと混和することがない」ということによって説明している¹⁵⁾。すなわち、これらの「四体液」のIV(3)「いずれかが分離して、それ自身において自立」(VI 40, 6~7. Littré)することによって、この「体液」の流動が起こり、これがそこから流出した部位と、これが流入した部位がともに病むことになる、というのである。医学者が、このように、疾病の発生のある特定の「体液」がほかの「体液」と混和することがなく、それらから分離し自立することに起因すると説明している以上、「四体液」の量と作用力のアンバランスが一定の限度内におさまっているかぎり、これらの「体液」の混合は維持され、これによって身体は健康に保たれる、と想定していることは明らかである。

このように「四体液」の量と作用力が一定の限度内にあることが、これらの「体液」の混合が維持されるための基本前提であるというとき、つぎに問題になるのは、これらの「体液」の量と作用力が一定の限度内にあるかどうかを定めているものとは何か、ということである。この役割をはたしているのが、身体の「自然」であると考えられる。ある季節に特有の気候のもとで、これらの「体液」のうちのいずれかが量を増大させ、その作用力

を強めるとき、ほかの「体液」はその作用力によって必然的に「熱を帯びたり、冷やされたり、乾燥したり、湿ったりする」ことになる。けれども、このような相互作用が身体の「自然」によって定められたその限度内にとどまっている場合には、少なくとも「四体液」の混合は維持されて、身体は健康に保たれる。他方で、これらの「体液」が身体の「自然」によって定められた限度をこえて、おたがいによって「熱を帯びたり、冷やされたり、乾燥したり、湿ったりする」と、このような混合がくずれることになり、ほかの「体液」との混合から分離し自立した「体液」が、身体のさまざまな部位において疾病を引き起こすのである。

以上の解釈が正しいとしたら、「自然」とは人間の身体のあり方をその正常な状態と働きに基づいて規定する概念として提示されている、ということになる。医学者は、身体が正常に働いている状態(健康)をそこから逸脱した状態(疾病)と区別するための基準となるような、規範的な性格をこれに与えているのである¹⁶⁾。

IV. 「自律性」と身体

このように「自然」が人間の身体のあり方をその正常な状態と働きに基づいて規定しているというとき、以上の概念は、身体が自己回復力(いわゆる自然治癒力)を発揮して、病んだり傷ついたりした部位をもとの正常な状態へと修復する働きと密接にかかわってくる。ヒポクラテスに代表されるコス医学派の医学論には、「疾病は自然が医学者となって治療する」という一節に端的に示されているように、身体のような自己回復力を「自然」に帰属する能動的な働きとしてとらえる、という見方もある¹⁷⁾。NHの議論内容からは、このような見方を医学者自身の明確な主張として読みとることはできない。けれども、少なくともそこには、身体がこの「自然」に基づくあり方に合うように自己調整の機能を働かせている、という考え方がうかがえる。

このことを裏づけていると思われるのが「自律性」という概念である。そのギリシア語の原語にあたる「アウトマトス」(*αὐτόματος*)については、ある事象が思いがけずに生じることを説明する場合の用語として「偶然に」とか「自己偶発的に」などの意味に解されることが多い¹⁸⁾。けれども、少なくともNH中の文脈における用例では、これとははっきりと異なる意味内容を与えられている。

VII(5)人々はこの時季に自律的に「胆汁」を嘔吐するし、薬剤を服用することによっても、もっとも胆汁様のもを浄化排泄する。(VI 48, 10~11. Littré)

以上の一節は、一年中で夏から秋にかけての時季に、「四体液」のうちの「胆汁」が人間の身体の内部においてその量をもっとも増大させるということをも裏づける事実として、この時季には「胆汁」の嘔吐が顕著に見られることに着目したものである。ここで、自律的な「胆汁」の嘔吐が薬剤の使用という医学的処置による「胆汁」の浄化排泄と関連づけられ、これと対比的に語られていることは重要である。医学者が、薬剤の使用という医学的処置によってめざしているものが、夏から秋にかけての暑く乾燥した気候のもとで、身体の内部で過剰となり、ほかの「体液」との混合が維持されるその限度をこえて作用力を強めた「胆汁」を体外に浄化排泄させることによって、身体をその「自然」に基づくあり方へと人為的に修復することにあるとしたら、自律的な嘔吐とは、「技術者」としての医学者がめざしているのと同じことを、身体がそれ自身の「自然」に基づく働きとしてなす、自己修復的な働きということになる。

同じことは、つぎの一節の用例についても言える。

XII(7)このような状態にある人々は、自律的に健康になるが、その大多数は〔肉質〕溶解しはじめたその時季において、四十二日以内に〔健康になる〕。一方、この時季をこえた人々の場合には、その人が何か別の害をこうむることがなければ、一年以内に自律的に〔健康になる〕。(VI 64, 10~14. Littré)

「このような状態にある人々」とは、若い頃の激しい労働に従事する生活から、労苦から解放された生活へと変わったことで、身体を構成する肉質が不均質となった人々のことである。以上の人々が何らかの疾病にかかると、やわらかい部分の肉質が溶解しはじめる。そのために、(a)発熱をとまわずに膿状の痰を吐いたり、(b)苦痛をとまわずに尿に膿状の沈殿物がみられたり、(c)排便に血液が混じったりする、というのである。

以上の説明の中で、医学者はこれらの症状を治療するための医学的処置については、何一つ言及していない。だが、この一節を含むNH第12章全体は、さまざまな疾病の発生原因とその治療方法について主題的に論じた一連の論述の一部をなしていることから、医学者が当初から診断治療上の関心に基づいて以上の説明を行なっていることは明らかである¹⁹⁾。これらの症状に関する記述に含まれる(a)「発熱をとまわずに」/ (b)「苦痛をとまわずに」などの指摘は、以上の症状が発熱や苦痛をとまって起こる場合とそうでない場合とがはっきりと区別されるという前提に立ったものである。(a) / (b)の場合には、患者は「自律的に」健康を回復するとされているのであるが、そこには、以上のような指摘にあたる

事例については、患者自身の側からの自律的な健康回復が見込めるので、何ら特別な医学的処置を必要としないということが含意されている。「自律性」とは、医学者が自らの「技術」によって実現しようとする健康回復という目的を、患者の身体がそれ自身の「自然」に合った正常なあり方として実現するための、自己修復的な働きを概念化したものとして提示されているのである。

このように、身体がそれ自身の「自然」に基づいて自己調整の機能を働かせているとしたら、この「自然」を身体の構成要素としての「四体液」からの創出的な産物とみなすことには、明らかに無理があろう。「四体液」は人間の身体を原理的に構成する要素として提示されている一方で、すでにみたように、季節の循環に合わせて増減をくりかえすという流動的な性質を、その「自然」に基づく属性として有している。これに対して、人間の身体は、気候風土などの周辺環境からのさまざまな影響をこうむりながら、そのあり方や働きを安定的に維持しつづける存在である。このような安定性は、身体がそれ自身の「自然」をいわば規範として、身体の構成要素にあたる「四体液」の量と作用力を、これが定める一定の限度内に保持することによって実現するとみてよからう。つまり「四体液」は、身体の「自然」に基づく身体の側からの働きかけによって、あくまでも働きかけられ調整される対象であるから、身体のこうした働きを規定しているこの「自然」を「四体液」の「自然」へと還元することはできないのである。

V. 結 語

以上の考察をとおして明らかになったことを整理すると、つぎのようになる。医学者は、人間の「自然」を一種類の元素あるいは一種類の「体液」から創出的に形成されたものであると主張する人々に対して、このような人間の「自然」にかえて、人間の身体の「自然」を医学論としての自らの論述における考察対象として提示した。しかも、この「自然」を身体の構成要素にあたる「四体液」からの創出的な産物としてではなく、むしろ、身体がその正常な状態を安定的に維持するために、これらの「体液」の量と作用力を一定の許容範囲にとどめ、また、これらの「体液」の量と作用力がこの範囲をこえた場合には、身体がこれらの「体液」に対して働きかけることによって、その正常な状態を修復するためのよりどころとなるような、いわば規範的な性格を有するものとして概念化したのである。

こうした概念化は、医学者が批判の対象としている人々の人間観と明確に区別されるような、医学者自身の人間理解の基本構想に基づいているように思われる。身

体の「自然」がその構成要素にあたる「四体液」からの創出的な産物ではなく、身体が「四体液」に働きかける上での規範としての役割をはたしているということは、この「自然」が「四体液」がその固有の「自然」に基づいて有するとされる属性や作用力のおよぶ範囲を身体というものに限定している、ということの意味する。つまり、この「自然」に基づいて身体は明確に領域化されることによって、いわば物理事象として、いわゆる「心的」な事象から基本的に区別される存在へと対象化されているのである。以上のことは、NH第4章冒頭における論述内容からも裏づけられる。医学者は「四体液」を人間の身体を原理的に構成する要素として提示した上で、IV「これら〔「四体液」〕が原因となって〔人間は〕苦しんだり、健康であったりする」(VI 40, 2. Littré)としている。この「これら〔「四体液」〕が原因となって苦しんだり、健康であったりする」という一文の主語にあたるものが「人間」とされていることは、重要である。医学者は、これら「四体液」のいずれかが身体の内部においてその量を増大させ、作用力を強めたことが原因となって生じるとされている「苦痛」を「人間」を主体として生起する事象として、身体内部において起こる諸事象からはっきりと区別しているのである。

医学者がこのように身体をその「自然」に基づいて、物理事象として「心的」な事象から区別するという方向に向かったのは、医学者がNHで批判の対象としている人々の人間の「自然」についての説明に、医学者たちの現実の医療行為をきちんと根拠づけるような、理論的な整合性を見出せなかったことによると考えられる²⁰。これらの人々の主張に基づいて「苦痛」が感じられるということを説明しようとする場合、この感覚は、人間の「自然」にあたりとされる一種類の元素または「体液」がその属性や作用力を自在に変化させることによって、そこから新たな形状や性質が形成されていくのと同様の仕方で生成するとみるべきである。つまり、このような形状や性質と「苦痛」との間には、そのあり方において実質的な違いはないということである。だが、このことは、医療現場において患者の診断治療にかかわる医学者としての経験則に基づく理解と合致しないのではないか。事物の形状、性質というものは、医学者が患者の診断治療にあたる場合に、その事物にそなわる属性として観察可能であるが、これに対して「苦痛」の存在については、現にこれを感じている患者の側からのうったえ、またはその様子やふるまいなどをとおして間接的に知られるにすぎない。このような経験は、「苦痛」がこれを感じている患者自身の内面にかかわる事象であるという想定へと医学者を向かわせたと思われる。すでにみたように、

医学者が「苦痛」を「人間」を主体として生成する事象として、身体にかかわる諸事象から区別しているのは、おそらく以上の想定に立ったものだろう。しかも、この「苦痛」を引き起こす原因を「四体液」の量および作用力という身体にかかわる事象に帰しているのは、患者の内面にかかわる事象である「苦痛」の原因にあたるものを物理事象として対象化することによって、医学者たちの診断や治療行為に対して、あくまでも観察可能な対象に基づく客観的な理由づけを与えることを意図したものであるとみることができよう。

ここには、いわゆる物質というカテゴリーに属する事物のあり方にかかわる基本的な視座の確立という、重要な事実を確認することができるように思われる。人間の「自然」を一種類の元素または一種類の「体液」からの創出的な産物としてとらえようとする場合には「苦痛」など、いわゆる「心的」な事象に固有とされる諸性質も、こうした一種類の元素や「体液」がその属性や作用力を自在に変化させることによって生じることになるので、これらを物理事象として「苦痛」などの「心的」な事象と区別するというカテゴリー区分自体が、そもそも適用され得ない²¹⁾。身体の「自然」という概念は、初期ギリシア哲学者たちの創出的な「自然」概念にかえて、以上のようなカテゴリー区分に基づく医学者の人間理解を基礎づけるものとして提示されているのである。

[凡例]

本論考中に引用した NH の日本語の訳文については、Jouanna, J.(ed.), *Hippocrate, La nature de l'homme* [CMG=Corpus Medicorum Graecorum, I 1, 3 (Berlin, 2002)] のギリシア語原文に基づいている。各引用文の最初に付したローマ数字(I, II…)は NH の各章を、(1) (2) などの番号は、各章ごとにおけるパラグラフ区分を表示したものである。また、引用文中の〔 〕を付した箇所は、訳出にあたって前後の文脈に照らして論者が補った部分である。なお、各引用文にはリトレ版[Littré, E. (ed.), *Oeuvres complètes d'Hippocrate, traduction nouvelle avec le texte grec en regard, tome VI* (Paris, 1846)] の当該箇所を併記した。

[文献と注]

- 1) A. Cornelius Celsus, *De Medicina*, Prooem., 5-8.
- 2) アリストテレス『動物誌』第 III 巻第 3 章 (512b12-513a8) には、NH 第 11 章の身体内部の

「脈管」系に関する記述がポリュボスという人物の名前で引用されており、またアノニウム・ロンドン写本(1-2 世紀)がその第 2 部(IV, 26-XXI, 9)で伝えているアリストテレス・メノン『医学論』(イアトリカ)要約の一部(XIX, 1-18)には、NH 第 3・第 4 章の論述と内容的に一致する記述が、ポリュボスという医学者の見解として紹介されている。以上の文書の資料的典拠としての評価をめぐる問題については、Jouanna, *op.cit.*, pp. 55-58.

- 3) ポリュボスがヒポクラテスの弟子の一人であったということを伝える主要典拠としては、ガレノス『人間本性論』注解書序論[Mewaldt, J./Heimreich, G./Westenberger, J.(edd.), CMG V 9, 1(Leipzig・Berlin, 1914)p. 8]のほか、ガレノス『エビデミアイ』第 II 巻注解書第 3 部[Wenkebach, E./Pfaff, F.(edd.), CMG V10, 1(Leipzig・Berlin, 1934)p. 300]をあげることができる。一方、ポリュボスがヒポクラテスの娘婿にあたる人物であったということについては、ガレノス『呼吸困難について』[Kühn, C. G.(ed.), *Claudii Galeni Opera Omnia* (Leipzig, 1821-33) VII p. 960]。
- 4) CH に収められた医学書のうち、この点をもっとも明確に裏づけているのは、『エビデミアイ』諸篇中の「気候」(カスタシス)と呼ばれる報告文書(特定の地域において一定期間内に発生した疾病とその症状を、気候状況と因果的に関連づけて記述したものである。さらに『環境医学論』(原題は『空気、水、場所について])では、ある地域に特有の気候風土が、その地域に住む人々の体質や性格(エートス)の形成にどのような作用をおよぼすかという問題にまでふみこんだ議論が展開されている。
- 5) NH 第 7 章では、VII(4)「人々が血性下痢にかかるのは春と夏がもっとも多い」(VI 48, 3~4. Littré)という事実が、春には身体の内部において「血液」が増大することを裏づける根拠として提示されている。
- 6) 『環境医学論』第 10 章、および『エビデミアイ』第 III 巻第 14 章を参照。これらの論述においては「胆汁質」や「粘液質」さらに「多血質」「黒胆汁質」のように、特定の「体液」に起因するとされる体質は、これら以外の体質(「湿性質」「浮腫質」など)と概念上同列であって、「四体液」を人間の身体における原理的構成因として指定するという視点は存在しない。
- 7) こうした見方を代表する研究として、Fredrich, C., *Hippokratische Untersuchungen*, Kiessling,

- A/Wilamowitz-Moellendorff, U. von (edd.), *Philologische Untersuchungen XV* (Berlin, 1899) pp. 27-29.
- 8) 医学者のこのような批判が具体的に誰に向けられたものかについては議論の余地があるが、少なくとも、その中に、多元論を主流とした前5世紀後半以降の思想的状況下で「空気」一元論を復活させた自然哲学者アポロニアのディオゲネスが含まれていることは確実である。Jouanna, *op. cit.*, p. 40, p. 226.
- 9) 「生成したもの」としての「自然」の理解に基づく、初期ギリシア哲学史における「自然」概念とその展開については、廣川洋一著『ソクラテス以前の哲学者』(講談社学術文庫/1997年), pp. 187-209.
- 10) Jouanna, *op. cit.*, p. 44 は、四基本性質に基づくNH第3章の原理論と第4章の「四体液」理論とは、人間の「自然」をめぐる説明として相容れないものであり、このような一貫性のなさが医学者の基本的立場を曖昧なものにとどめている、と指摘している。
- 11) この論証の仕方は、明らかに、エレア学派の哲学者メリッソスの論法に依拠している。Jouanna, *op. cit.*, pp. 244-5. とくに(a)については、メリッソス作品断片DK. 30B7(2)および(4)に対応している。
- 12) ガレノス『人間本性論』注解書第I巻第7章 [Mewaldt et alii, *op. cit.*, pp. 21-23]を参照。
- 13) Littré, *op. cit.*, pp. 35-37 [“beaucoup de substances qui, s'échauffant et se refroidissant, se desséchant et s'humectant l'une l'autre contre nature”] / Jones, W. H. S. (ed.), *Hippocrates IV* [Loeb Classical Library (Harvard, 1931)] p. 7 / Jouanna, *op. cit.*, p. 169.
- 14) この解釈に立った「自然」概念と一致する代表的な用例を含むものとして、プラトン『ティマイオス』篇82a以下の論述内容を参照。そこでは、人間の身体を形づくる四種類の元素(「土」「火」「水」「空気」)が「自然に反して」過剰となったり不足したりすることが、身体内部に不調や疾病を引き起こす原因の一つとされている。これらの元素のいずれかが身体内部において過剰となったり不足したりすることが、身体の「自然に反して」いるというのである。
- 15) Jouanna, *op. cit.*, pp. 256-7 も指摘しているように、医学者が「四体液」のいずれかが過少になることも、身体内部でほかの「体液」から分離することの原因に含めているとしたら、医学者の説明にはいささか問題があると思われる。ほかの「体液」から分離し、それ自身において自立するのは、この「体液」が身体内部で増大し作用力を強めることによる、と考えるのが自然であり、現にIV(3)の論述では、この前提に立って説明がなされているからである。この個所については「過少または過多」を「より多く」($\mu\alpha\sigma\sigma\omicron\nu$)に修正するという提案(Jouanna, *op. cit.*, pp. 95-6)もあるが、ここでは問題の指摘のみにとどめる。
- 16) 「自然」のこうした規範的性格については、以下の論考において論及した。拙論「ギリシアの医学思想と人間—ヒポクラテス『医師の誓い』における人間観」(『セミナー—医療と社会』第24号[2003年12月]pp. 3-14)を参照。
- 17) 『エビデミアイ』第VI巻第5章第1節の冒頭の一文(V 314, 5. Littré)を参照。
- 18) CHに含まれる医学書のうち、以上の意味に基づく「アウトマトス」の代表的な用例としては『技術論』第6章を参照。その原義は、ホメロス『イリアス』第II歌408行(メネラオスが[アガムノンに促されることなく]自らすすんで、生贄の儀式の場所に向いていく場面)に端的に示されているように「思考や行為が[外的な働きかけなく]それ自身の側から発する」[Boisacq, E. (ed.), *Dictionnaire Etymologique de la langue grecque*, 3 édition (Paris, 1938) p. 103]ことである。アリストテレスは『自然学』B巻第4章~第6章および『形而上学』Z巻第7章~第9章において、生成論の視点に立って、以上の概念に論及している。このうち『形而上学』Z巻第9章では、身体の健康を「技術」[としての医学]によって生じるだけでなく「アウトマトン」からも生じるものの代表的な事例としてあげ、その理由について、健康の質料的部分(?)にあたる「熱」には「自らによって燃るべき仕方でも動かされ得る」(1034a14)性質があって、健康の形相を「技術」として有する医学者の働きかけがない場合でも、この「熱」に帰属するこうした運動によって健康がつくり出されるためであると説明している。ここで重要なのは、アリストテレスが身体の健康とは基本的に「技術」[としての医学]の制作対象であるという理解に立ちながら、これについては、通常の「技術」制作品にはみられない(いわば例外的な)生成の仕方をその質料的部分の運動という観点から説明するために「アウトマトン」という概念を用いている、ということである。ここには、NHにおけるように、人間の身体がそれ自身の「自然」に基づいて自己調整の機能を働かせているという視点は存在しない。

- 19) Jouanna, *op. cit.*, p. 26 は NH を(その続編とされてきた『健康的な生活法について』全9章を含め)全体として3部構成に立った一貫した論述とみなした上で, その第II部にあたる第8章~第15章を「疾病の原因とその治療法」について主題的に論じた部分にあたるとしている。
- 20) 「苦痛」という事象に対して, 自らの経験的な理解に即して, 合理的な説明を与えることは, 医学者たちにとって重要な関心事であったと思われる。この問題については, 拙論「医学から「心身」の科学へ—ヒポクラテス『神聖病論』第14-17節の解釈を中心に—」(弘前大学人文学部『人文社会論叢』[人文科学篇]第7号[2002年2月]pp. 45-65)を参照。
- 21) Guthrie, W. K. C., *A History of Greek Philosophy I: the Earlier Presocratics and the Pythagoreans* (Cambridge U. P., 1962) pp. 62-67 は, ミレ

トス学派に代表される初期ギリシアの自然哲学者たちにおいては「物質的」/「非物質的」という概念上の区分が明確化していなかったということを論拠として, 彼らに「唯物論者」(materialists)という呼称を用いることは避けなければならないとしている。

[付記]

本論考は, 日本科学史学会第51回年会・総会(平成16年5月29~30日/東京工業大学)における口頭発表に基づいている。この発表の内容に関して, 伊東俊太郎先生(麗澤大学教授)より有益な指摘をいただいたことに対して謝意を表したい。なお, 本研究は, 平成16年度科学研究費補助金基盤研究(c)(2)「ギリシアの医学思想と人間—同時代の哲学的人間観との比較研究」に基づく研究成果の一部である。

Résumé

Greek Medical Science and its Understanding of *Physis*,
as Conceptualized in the Hippocratic Treatise *De Natura Hominis*

Masahiro IMAI

It has often been claimed that Greek medical science has its origin in the rational explanation of the world among the early Greek philosophers that constituted their inquiry into nature. However, there were doctors who made an attempt to establish medical science as existing independently of any philosophical intrusion. This can be elucidated through the analysis of the medical term *physis*, conceptualized, among others, in the well-known treatise in the Hippocratic Corpus, entitled *De Natura Hominis* (NH).

In NH, the Hippocratic doctor criticizes philosophical anthropology and medical theory, which hold that human nature comes into being emergently from single elemental stuff such as Air, Water etc, or from a single humor. His own view of human nature claims that the four humors (blood, phlegm, yellow bile and black bile) constitute the nature (*physis*) of human body. The human body has its natural powers inherently for preserving health, and, if anything does harm to it, it functions autonomously for restoring its normal condition. In this context, the term *physis* denotes what determines the normality of the body, in which its humoral constituents remain harmonized with each other.

Through the conception of *physis*, applied principally to the body, the human body will be demarcated as the physical or material aspect of human nature, as opposed to the monistic view of human nature, which has not drawn a categorical distinction between the material and non-material.